

# 全 友

NO. 201

10 / 49



## 仏教と人口問題

人類の危機感と不安が益々深まる今日、全世界注目の中にブカレストにおいて国連世界人口会議が開かれ、人口問題が討議されたが、その行動計画をめぐり、各国の政治、経済あるいはイデオロギイ的立場より対立が生じているようである。しかしながら、有限の地球上で人類のよりよい未来に対し、世界人口行動計画が採択され人口問題に對し、まがりなりにも第一歩が踏み出されたのである。

宗教と人口問題は深いつながりをもっているが、仏教界においては、はいまだ明確な意見がない。

第二十二回全日本仏教徒会議において『人類の危機を救おう仏教で』の大会スローガンのもと、仏教的立場(国益、イデオロギイを超越して)よりこの人口問題に對し一つの指針が出ることを期待するものである。

(J・H)

(写真は箱根の富士見荘で行われた第七回仏教シンポジウム―講演される小松左京氏(六面参照))

昭和49年10月1日

# 人口問題に仏教の叡智

## 仏教徒会議、来月開く

既報のとおり、第二十二回全日本仏教徒会議は、来月六日、京都知恩院和順会館を会場に開催されるが、先ごろ趣旨および要項が発表された。今回の会議の核は人口問題であるが、午前中の基調講演には先の日本人口会議の大会議長の核め、プカレストの世界人口会議にも出席された、人口問題の権威者大来佐武郎氏を招き、加えて仏教学者数名を助言者に午後のシンポジウムを行う。今やこの人口問題は人口抑制をも含んで、仏教界の意見が強く求められているので、早くも報道はじめ各方面から注目が集っており、会議の大きな成果が期待される。

### 開催要項を発表

趣旨

最近地球を船にたとえて「宇宙船地球号」と呼んでいる。現在この地球号には三十七億八千万人（国連年次統計一九七四年六月三十日発表）の人間と二百万種に近い生物が乗りこんでいる。そしてそれぞれの生物は、自分以外の生物を喰べて生きていくという相互依存の関係の上に立っている。これが厳粛な事実である。二十五億年前に生命が出現して以来多くの種の生物が死滅し、また多くの生物が出現して来た。百万年前に人類が誕生したといわれるが、人間は必ずしも肉体的には強者ではない。それにも拘わら

ず、他の生物との生存競争に完全に勝ち得たのは、生物学的な遺伝情報他に人間は第二の遺伝情報としての文化を作り上げたからである。しかし今やこの人間の英知が作った文明によって、自から滅亡せしめるかも知れない環境を招いてしまった。即ち公害がそれである。同時にまた、人口の爆発的增加にも人類を滅亡に導く現象であるとして極めて大きな問題となっている。即ち昨年は「環境年」と呼ばれたのに対し、今年には「人口年」と名づけられて国連主催の世界人口問題プカレスト会議をはじめ、各国各地で同様な会議が開催され、その対策の検討が重ねられている。

「人類の危機を救おう 仏教で」をスローガンに昨年の仏教徒会議は主と

して環境アセスメントに関する問題を討議した。ますます深まる危機感と不安に対して仏教徒は何をなすべし。とくに人口問題を含めて真剣に考えようとするのが本年度仏教徒会議の趣旨である。仏教徒の衆知が会議に集中されることを強く期待して。

宗派代表者会議「仏教は人類の危機をどう救うか」  
シンポジウム「人口問題と仏教」  
仏青代表者会議  
仏婦代表者会議  
三、会議日程（十一月六日）  
九時 受付開始  
十時 総会  
十一時 基調講演  
十二時 中食  
十三時 会議  
十六時 レセプション  
四、参加方法  
資格 加盟団体の推薦する代表者（五名以内）  
参加費 無料

### 二、会議テーマ

一、スローガン 「人類の危機を救おう 仏教で」

## 人口問題と仏教の立場

平川 彰



平川 彰

人口の急激な増加が世界の大問題になった。一九八〇年には世界の食糧の絶対量が不足して、多くの餓死者が出るという予想すらある。そこで「人口抑制」が必然的に問題になってきた。これは「人間が人間の生命をコントロールしてよいか」という問題であり、あるいは「堕胎をどう考えるか」という問題にもなる。

しかし、この問題に対する仏教者の発言は極めて少ないのであり、多くの仏教者がこの問題をどう考えているのかよく分らないのが現状である。「仏教の立場」という題を与えられたが、仏教者を除い

て仏教があるのではないから、ここにはただ私見を述べるにとどまり、いわば問題提起におわると思う。多くの仏教者が、この問題に対して自己の信念を卒直に述べて、衆智を集めて仏教の立場を明確に主張すべきであると考ええる。

この問題は深刻な問題であるから、ただ結論だけを述べても問題解決には思われないので、与えられたスペースの中で二、三の問題を取り上げたい。

まず、「生命をどう考えるか」という問題がある。仏教では「生死の得脱」を説くのであり、生と死を平等に見る。生のみを肯定し、死を否定するのではない。生れたものに死は免れないから、時が来れば死を受け入れるのが生物の常道である。ゆえに死をいかに受け入れるかが、仏教の大問題である。これは自然の肯定にもつながる。舍利弗は仏陀の涅槃の近きを知って先に滅度したというし、仏弟子ゴデーカは六度悟って六度退転したので、七度目に悟ったとき刀をとって自殺したという。ジャイナ教でも悟った人の自殺を認めているという。日本でも禅宗の高僧などには、老齢になって周囲に迷惑ばかりかけ、生きていく意味がないと知ったときには、自殺に近い形で死を受け入れる人もあるようである。

しかし、仏教が自殺を肯定するといっても、特定の条件のもとでいうのであり、達人の場合のみ許されるのである。一般論としては仏教でも自殺は許さない。仏教の不殺生戒では、生物を殺すことも

墮胎もはっきりと禁じており、自殺も否定されている。しかし、不殺生戒は生命の無条件の肯定よりも、他の生物に対する愛情、慈悲に基いて主張される。「生きたい」というのは生物の本能であるから、この願いに對する同情から不殺生戒が主張される。同時に、生物はそれぞれ生きる目的を持っている。その目的を達成させるためにも、積極的に生命を愛護するのが仏教の立場である。自己も自己の生きる目的を達成すべきであるので、自殺は許されない。

「生」とは、生きることであって、単に生きていることではない。高貴なる目標、解脱の実現のために生きるところに仏教の生の意義がある。仏教徒にとっては無常と合一した「永遠の生命」は望ましいが、死によって断ち切られる「無常の生命」は決して完全なものではない。すなわち粗悪な質の生命を止揚して、上質な生命に転換していくことが、仏教の生命観であると思う。この点、キリスト教が生命を神から与えられたものとして絶対視するのと立場が異なる。生死の世界の生命については、仏教は相対主義をとるのである。

生命の相対主義は、縁起の立場から出てくる。これは人生を苦と見る立場とも通ずるものである。それは無生物の世界をも含めて、調和を実現する大生命の世界を指向するものである。例えば植物が炭酸ガスを酸素に変えてくれなければ動物は生きられないのであり、無生物、植

物、動物の相互循環、相互依存のうちに生命の発展を受けとめるのである。人間の生命だけの絶対性を主張することは、この相互依存を破壊して、かえって人間を滅ぼすものである。ここに草木国土の成仏の思想なども出てくるのである。

種としての生命の存続という点では、このような縁起の立場で考える限り、人口の無制限な増加は認められない。人口の抑制が必要である。地球上に無理なく生存しうる人口の数は、計算で容易にはじき出せるであろうが、しかしその数字をどのように国家や民族、あるいは個人に割り当てるかの「方法」には困難な問題がある。プカレストの「世界人口会議」がさしたる成果を挙げなかったのもナショナリズムの対立が大きな障害であったようである。利己主義をいかにして超えるかが、人類の当今の課題である。

人口抑制の問題は「種」としての人類全体の問題であると共に、「個」としての個人の問題である。直接には避妊や妊娠中絶の可否の問題となる。日本は中絶天国であり、日本の人口計画が模範的に達成されたのは、仏教の影響が無かったからだともいわれる。たしかに仏教は現代の日本人にさしたる影響力を持っていないが、しかし、これは日本人の生死観を来世観に大きく動かされていると思う。日本では母親が子供を殺して、母子心中をすることがよくあるが、その際、母親は幼い子供を残していくよりも、一緒に死ぬ方が子供の幸福であると思うのであ

ろう。すなわち子供を殺してもあまり罪悪感がないのである。墮胎の場合も同様に、墮胎に罪の意識が薄いようである。これは、日本人の死後の世界の受けとめ方と関連して考へべき問題である。

西洋人は墮胎に強い罪の意識を持つ。それは日本人の想像を超えるものである。西洋人が墮胎をする場合には、この罪悪感をおして行うのである。しかし最近では西洋でも妊娠中絶の要求が日まに強くなっている。

私は、日本人の母子心中や妊娠中絶が西洋人の考え方でそのまま断罪されるべきだとは思わない。しかし仏教の縁起の立場から見ても、このようなことが許されてはならない。すなわち、そのようなことが起らないような社会環境を作るために努力しなければならないと思う。

たとえば、墮胎についていえば、何人も墮胎を好むものではないのであるからそういうことが起らないような社会条件を整えるべきである。仏教では、母胎に識が托するときに生命の始源と見る。父母の交会と前世から流転してきた識とが合一して、母胎に托するのである。識を立てるのは、父母の遺伝質だけでは、自己の主体性の確立には不足と見るからである。ともかく、受胎が生命の始源であるから、中絶しなければならぬような受胎を避けるべきであり、そのためには狭野式避妊方法だけでなく、器具や薬品などを用いることも、仏教の考え方からは何等非難されない。同時に性的快楽は無条件に肯定しないような正しい性倫理

の確立も必要である。なお墮胎は否定されるとしても、母胎の生命が危険にひんした場合までも拒否すべきだとは言えないであろう。

# 人口問題の参考資料

最近の新聞  
紙上から

## ◎加速化した世界人口増加

一九四〇年代には一%にすぎなかった世界人口の増加率は第二次大戦後に急激に上昇しはじめ、現在では二・一%の高水準となっている。

その結果、こゝしのはじめの世界人口は三十九億人に達したものと推定されているが、年二・一%増は三十五年間に世界人口が倍になることを意味している。このまま推移すれば、二十一世紀はじめの世界人口は七十億人を超えることになる。とくに世界人口の七〇%を占める開発途上国の人口爆発が目立ち、国連は一九八〇年以降に開発途上国での人口抑制策が効果をあげるようになって、世界人口は六十四億人余になると見通している。

いまの調子で世界人口がふえると、開発途上国では貧困と失業、先進工業国では環境汚染、過密、エネルギー不足などが深刻化することは避けられない。

(九月二日付朝日新聞)

## ◎国連世界人口会議

八月十九日から三十日まで、ルーマニアの首都ブカレストで開催。百三十五カ

ともかく、種についても個についても人口問題は、縁起の立場で調和のある発展を計るのが仏教の立場であると考えられる。(東京大学教授)

国と国際専門機関の代表が参加、議題は①最近の人口動向と将来の展望②人口変動と経済社会開発③人口、資源、環境④人口と家族⑤結論としての世界人口行動計画の五つを取り上げた。

## ◎人口問題異論が続出

そのすべてに政治、経済、社会あるいは宗教に根ざす考え方の違いがからんで参加国の意見は大きくわかれた。(中略) 開発途上国は先進国がこれまでやってきたことに對し、強い不満をもっているの、話はどうしても南北問題につながっていった。中南米、アフリカ、東欧諸国の代表は「人口問題は従来の社会経済制度の矛盾から生じたものであり、その根本原因は開発が遅れていることにある」と主張して、開発の促進を求めた。

なかにはチュニジア、ケニアのように人口問題が放置できない状態になっていることを認めた国もあったが、「南」の多くの国は先進国からの人口抑制押しつけに反発した。そして「北」の諸国に対して資源消費が「南」側よりはるかに多いことに反省を促し、この事態を速やかに改善するため適切な措置をとるべきだと

と主張した。(九月二日付朝日新聞)

これに對してアジアは、人口爆発の焦点でもあり、現実はいますぐ抑制の必要な憂慮すべき状態であるとの認識が強く出て、国際協力を求める声が強かった。

アメリカは「先進国では、早く静止人口に達することが望ましい」と。(中略) フランスは「子供の数は夫婦が責任を持って自由に決める」ことが大原則だと主張、西ドイツは、カント、マルクスを引用して、社会進歩の哲学を説いた。カナダも含め、もちろん「行動計画」に反対ではないが、積極的支持を呼びかけるほどの強い主張でもなかった。

## 一方、国連の機関は、いずれも人口問題の重要性を訴えた。

とくに人口活動基金は、経済開発から取り残された農業の発展が急務であると示唆。世界保健機関は死亡率を下げることは、基本的人権であり、長期的には人口増加を抑えることにつながると主張。食糧農業機関は食糧増産に對する樂觀論を戒めた。(八月二十一日付朝日新聞)

最後に世界人口行動計画の核となっている「人口抑制の目標」について(中略) 「自国の出生率とその国家目標を阻害すると考える国は、量的目標を設定し、一九八五年までにその実現をはかるための政策をとることが要請される」という修正案が採択された。(九月二日付朝日新聞)

## ◎日本人口会議

七月二日から四日、財団法人人口問題研究会など民間四団体主催で開催。会議

は①人口と資源と食糧②人口と環境と生活③人口問題と人間性をめぐって④人口静止と行動計画をテーマに討論方式。

## ◎産児制限で人口増に歯止め

日本の人口はいま、約一億九百万人である。その増加率は最近やや上昇して年一・二%になったが、国際的には低位を占めている。人口増が横ばいになったあと静止するとしても(人口ゼロ成長)、その時期は二十一世紀に入ってからで、人口規模は一億三千万人くらいになりそうだ。(七月二日付朝日新聞)

## わが国は戦後十年間で出生率が半減するなど世界に類を見ない人口革命を経験した。(七月二日付朝日新聞)

これまでわが国の人口抑制が比較的うまくいったのは、いわば国民のチエのおかげである。(中略)

人口増加率は低くても、一人あたりの資源やエネルギーの消費、環境に与える影響は数十倍も大きい。そのうえ、わが国は食糧や資源の多くを海外に依存していることも考慮しなければなるまい。

(七月六日付朝日新聞)

宣言は(中略) 人口問題は抑止政策だけで解決される問題ではなく、一方で国土のより計画的、効率的な利用、食糧の増産、資源の供給、環境保全と両立する生産向上などに国民の知恵と努力が結集されねばならないとも強調し、さらに先の人口問題審議会の答申がやや具体的対策に欠けたうらみがあつたのに對し、「子供は二人まで」という国民的合意達成を前面に押しだすなど行動計画にも触

全 第3種郵便物認可 仏

れた点が注目される。国会議が政府に對し可能なところから直ちに行動を起すよう要望した事項は▽人口庁の設置と人口研究機関の拡充▽学校及びマスコミなどを通じての人口教育の促進▽ピル（経口避妊薬）IUD（子宮内避妊器具）の公認と新しい避妊法の研究推進（中略）など。（七月五日付朝日新聞）

◎動き始めた宗教界

なかでも注目されるのはカトリックの出生。産児制限には最も厳格な立場をとり続けている。カトリックの公式態度は一九六八年七月にローマ法王パウロ六世が発表した「人間の生命宣言」で明らかだ。人工妊娠中絶は、医学的な理由でも禁止。受胎調節は、自然の禁欲法（つまり放野式）だけが認められ、避妊用具、薬品は一切だめである。といつても、人口爆発がよいといっているわけではない。「中絶や避妊用具を用いる産児制限。神の摂理に反する行為に反対しているのであつて、禁欲法、性教育、社会教育による人口抑制には賛成です」（名古屋の一神父）。こうした姿勢は、二千年間変わっていないという。（中略）

キリスト教でもプロテスタントの立場は、ずっと進歩的である。産児制限の手段についても、夫婦が合意し、夫婦と新しい生命のいずれにも害がなければ、夫婦の自由になされている。中絶も医学的な理由なら認める傾向が強まっている。

「人口増加による圧力の大部分は、貧困と社会的不正によつて、すでに痛めつけられている社会層に降りかかる」「人

口政策が真に人間にふさわしい社会開発とマッチしているかどうか、とられる手段が家族の尊厳と権利を侵害するものにならないかどうか問題である」「社会的経済的条件を変える目的で、ただ人口政策のみに焦点を合わすことは誤りである。人口政策が真に効果をあげるためには、社会正義に基づいて社会的条件を改革していくことが必要である」——昨年発表された世界教会協議会（プロテスタント教会と正教会の代表機関）の「人口政策、社会正義と生活の質」の要旨である。

中東、アフリカ、インドネシアのイスラム教、インドのヒンズー教など、民衆の生活の中に生きていく宗教は、多かれ少なかれ価値観に影響を与えている。しかし、一夫多妻が認められているイスラムの国でも、小家族を指向した新しい価値観、女性解放の芽はのびている。

日本人に身近な仏教はどうかといえ、仏教界が人口問題を真剣に考え始めたのは最近のことである。仏が殺生を禁じている以上、どの仏教団体も中絶を非難するのは当然だが、避妊についてはまだ統一見解を打ち出せるところまでいってはいない。各宗派によつて態度は微妙に異なる。現在は産児制限を黙認しているといつたらいいだろう。各宗教に共通しているのは、人口問題に関して、社会派と教義派の対立があることだ。そして人口問題を宗教者の問題として受け止めようとする社会派が表面に出てきている。（八月七日付毎日新聞）

黄金菩提樹葉



(意匠登録出願中)

成道の聖地ブダガヤの菩提樹の葉を、その自然の姿を崩さないように純金加工して美しい二重額縁に納めたものです。お仏間にぜひお備え下さい。

タテ 36cm ヨコ 32cm  
 ￥ 17,000 (送料別)  
 千代田トラベル物産部へお申込み下さい。

インド仏跡参拝団

印度山日本寺開山一周年記念法要団

主催 (財) 国際仏教興隆協会  
 期間 昭和49年12月2日から 17日間  
 12月18日まで  
 費用 380,000円  
 (宿泊、食事代を始め団体行動中の経費一切を含みます)

昨年12月8日全日本仏教会法要団により落慶法要が厳修された成道の聖地ブダガヤの印度日本寺の開山一周年記念法要に随喜し、六次大跡参拝とカトマンズ(3泊)、アグラ、デリーを訪ね、帰路バンコックに一泊します。  
 お申込みは早目に千代田トラベルへこのほか11月以降2月まで毎月インド仏跡参拝団がございます。

運輸大臣登録一般154号

株式会社 千代田トラベル

CHIYODA TRAVEL, INC.

東京都港区南青山5丁目6番20号  
 〒107 (千成ビル)  
 TEL. { 407-3612 (代)  
 400-5100

# 「人類の未来と仏教」シンポジウムをふりかえって

(上)

山 口 賢

既報の通り、日本仏教文化会議の第七回シンポジウムは、さる八月二十六・二十七日の両日、箱根仙石原の湖尻富士見荘を会場に開かれ、東洋大学教授で文化専門委員の金岡秀友文博が「仏教の未来観について」と観して、またSF作家で「日本沈没」の著者でも有名な小松左京氏が「人類の未来と宗教」の題下にそれぞれ基調講演を行なったが、その内容を要約すれば、ほぼ次の通りである。

## 倫理の確立が課題

— 金岡氏の講演要旨

仏教の基本的な立場における未来観は時間論としてあり、過去・現在・未来に同じウェイトをおく論（説一切有部）と現在には有体、過去・未来は無体とする経量部、唯識などの論がある。

具体的な未来観は、これを①人類の全体的な未来観（総合的史観）と②生死世界に自己完結する個人の未来観（人間観）とに分け、仏教は、これらをどのよ

うに説いているかを考えてみよう。  
①の場合は、人間の寿命（定命）などが次に増加していく上昇的・進化論的史

観（増劫）、それとは反対に下降していく退化論的史観（減劫）、さらには、この進化和退化が波状的に繰返されるといふ史観（増減劫）、また減劫から、さらに壊劫の三災説などがあつて人類の覆滅をとき、有名な大乗仏教の末法・五濁説は、仏教史上大きな影響を及ぼしている。一方には「無記」の立場から未来は断定できないとし、また三世十方常住の諸仏を説く大乘経典は多い。

②の人間観よりする未来観は輪廻と業をその特色とするが、仏教はそれより解脱する教えである。この考え方は永恒回帰の東洋的人生観であり、業生思想はいわゆる自業自得、キリスト教の最終審判的な考え方とは全く異質である。このこととは仏教という地獄が懺悔（サンゲ）の場であり、エンマは審判者ではなく、業生から願生の世界に転ずる大乗仏教思想の接点にエンマがあるとする考え方に象徴的である。解脱は未来観であるが、現実の人間にとっては当来成仏の教えであり、それは多くの經典にある「授記」の思想で保証されている。

以上のような仏教の所説から導き出さ

れる結論として、私は仏教からの未来への発言として次の三つをあげたい。

その一は仏教は未来について悲観・樂觀いずれをも説くがまたその中間あるいは無記の立場もあり、総じては三世十方常住の諸仏のもとに当来成仏を確信せしめる成仏教である。このことは人類全体としても、また個人の上からも未来に對し絶望するなという教えだといえよう。

第二に、これは今まで誰もいわないことであるが、国家を最高善とする現在の世界機構にクサビを打ち込む必要があると思う。この点について基督教でも「神の子」「隣人」といい、仏教の一切衆生、その他世界宗教といわれるほどのものなら、めざすところは一つである。

その三には外的条件として、すでに社会科学と倫理学とが無縁であった時代は去っている。仏教は未来に對して提供する倫理の有効性を確立せねばならない。仏教の一切智（世間智・出世間智）を現代社会の個人・組織倫理面に、いかに生かし得るかが、向後の宗教者に与えられた課題であろう。

## 情念処理への期待

— 小松氏の講演要旨

私は現代に生きる一市井人として、宗教のもつ遺産の大きさにふれ、宗教人に期待することを述べたい。

宗教的感情は、未開民族の時代から人間が根源的に具備していた。人間は並はずれた推理力、想像力をもつために、環境と調和せず不安を抱き、あるいは自ら

不安をつくり出した。そして、その説明を求め、これを体系化したのが宗教といえるだろう。

遊牧社会から農耕社会へ移行するにもなつて、古代エジプトにおけるように社会的なシステムエンジニアリングとして政治の中枢にあつたこともある。これはおおむね呪術的であつたが、前七世紀から五世紀ほどの間に世界的大宗教が発生した。その中でゾロアスター教と仏教とは、その教義の上からも非常に対象的であつて興味をそそられる。

ゾロアスター教はアリア人の戦闘的宇宙観を示す宗教で、善悪二元論をとつて戦いを神聖化する。「正義の戦い」という概念もここに生れ、最終戦争のあとに樂園を予想し神の命に従う戦士を賞讃する。これはユダヤ教、キリスト教、イスラム教にも大きな影響を及ぼしている。

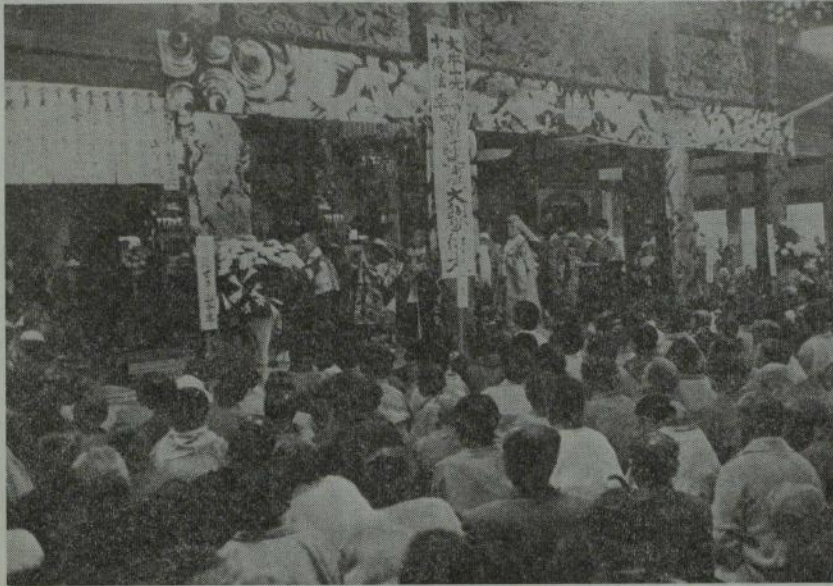
これに對して仏教は、輪廻から万人の解脱を説く教えであるが、私は釈尊が四無記といつて、宇宙論や生命論、あるいは靈肉論などについて答えなかつたことに感動した。宇宙論と宗教的救済とが結びつくことによつてドグマが生れ、いろんな不都合なことがある。釈尊が宇宙論と救済を確実に分離したことは賢明であり、これは偉大な智慧だと思ふ。

いずれにしても、宗教は過去においていふんな誤ちもあり、また妥協もあつたかも知れないが、人間の歴史に大きな影響を及ぼし、しかもその遺産はストックされて現代にうけつがれている。かつて人類の不安を除去するため、お

# ふたごの仏事

双盤の響きが境内にこだまして、さしもにざわめいていた人達も注意・注目したところで、お念仏がはじまる。

双盤の響きが境内にこだまして、さる優しさ、弱々しさからは程遠い力強さで腹の底まで泌みわたってくる。紋服、袴の在家客が一層参詣の人々の仲間意識をかき立て、何もほかのことは考えない、考えられない急調の双盤につれて、ナムアミダブ



父祖代々うけついで来た節調が、鍛えに鍛えた声ののって、およそ念仏という言葉から連想される

## 「鎌倉のお十夜」

よいよたけなわである。「お十夜」法要はいくまでもなく、無量寿経の十日十夜の此土修善が他方国王の千歳の善に勝るとの文に基づいたもので、全

間意識をかき立て、何もほかのことは考えない、考えられない急調の双盤につれて、ナムアミダブの声々が堂の内外を圧する。と、こ鎌倉材木座光明寺のお十夜はいくまでもなく、無量寿経の十日十夜の此土修善が他方国王の千歳の善に勝るとの文に基づいたもので、全

国諸所で行なわれているが、十五世紀以来の伝統を持つ鎌倉光明寺のものが最も有名でもあり、盛大でもある。十月十三・十四・十五日の三日三夜に短縮されているが、近郷近在三浦半島一円からお驚（こも）りする善男善女も少なくない。

そして堂内を埋め尽した信者たちの前に、引声阿弥陀経による法要が展開されて「お十夜」は最高調に達する。それは文字通り展開というに値する美しさを備えている。それぞれ水冠に七条の袈裟をまとった式衆が、導師を中心に左右二列に並んだと見るや、誦經につれて交互に練り出して横の列になり、横の列は今風にいえば相互の一方通行の重なり合いとなつて、常に一列毎にすれ違う行道を行うのである。

おむね宗教が環境の説明を行なっていたが、個別科学の発展によってその大部分が宗教の手を離れた。しかし、どうしても科学・技術のシステムに組み込まれないものがある。それは煩悩、貧欲、憎悪というような情念の処理であり、これは古くて新しい根源的な問題である。

### 天台宗ハワイ別院一周年記念に特別参拝団を募集

天台宗ハワイ別院（荒了寛住職）は、昨年十一月開設以来、活発な活動を展開しているが、一周年記念行事を盛大に開催することになった。ハワイ別院開設の母体となつている天台宗海外伝道事業団（今東光理事長）では、十一月二十七日より十二月二日にわたる一週間を記念行事期間に定め、今東光師の記念講演、名僧墨跡展、記念大法要など盛沢山の催しを用意している。なお今東光師を団長と

昭和49年10月1日

する参拝団には、先ごろ出家した瀬戸内寂聴尼も同行する予定である。

事業団では、四泊六日(十一月二十七日より十二月二日)三食付の旅程を、十五万七千円の低廉な費用で参加者を募集中であり、申込みは、東京都港区新橋三ノ三ノ九、阪急交通社ビル内、天台宗海外伝道事業団(電話03五〇三一七三〇八)にするようにいつている。

哀 悼

柴山全慶師(臨済宗南禅寺派管長、南禅寺住職)八月二十九日午後十一時、肝性こん腫のため京都市上京区の京都府立医大病院で逝去、七十九歳。師は昭和十四年臨済学院教授、十五年大谷大学教授(禅学講座)。三十四年臨済宗南禅寺派管長に就任、以来三期連続で管長を務めた。

著書「無門関」を自ら英訳、「英文無門関」がこのほどアメリカで出版された。エスペラント語、英語に通じ、毎年アメリカの大学に招かれ、禅の講義を通じた。

昭和五十年版

全仏手帳

申込み受付中

全仏総務局では、左記要領にて「全仏手帳」を発行致します。部数に限りがございますので、御注文はお早めにお願ひ

して全一仏教運動の世界的な働きかけを行なわれた。

半田孝海師(前長野県仏教会長、善光寺名誉普賢主)九月十七日午後十一時四十五分、直腸ガンのため逝去、八十八歳。師は水戸市出身で天台宗大僧正。比叡山樹王院住職、天台宗教学部長などをつとめ、善光寺副住職時代は原水爆禁止運動にも活躍され、イデオロギーを越えた運動の統一を常に主張、全一仏教運動の展開にも県仏会長として腕をふるわれた。

事務局録事(九月)

- 二日 長岡慶信元副会長本葬参列
- 三日 組織専門委員会 全仏編集会議
- 十日、十一日 関西各山訪問
- 十九日 局内会議
- 二十六日 税制調査会(自民党)出席
- 二十七日 大阪府仏教徒会議出席
- 〃 南禅寺柴山管長本葬参列
- 二十八日 創立十周年岐阜県仏教会檀信徒大会出席

致します。

内容 三帰依文、四弘誓願・宗門聖日 加盟団体役員住所録、忌日早見表その他

定 価 三五〇円(送料実費)

出来日 十一月初旬

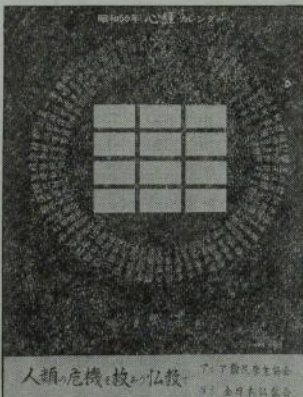
申込先 東京都台東区西浅草一―五―五 (一一一)

全日本仏教会総務局

発行人 桜井大乗 編集人 清胤徹昭 発行所 財団法人

全日本仏教会

推薦 全日本仏教会 昭和50年心経カレンダー



この心経カレンダーは円相円満大調和の中に「日々是好日」のよき日をお迎えになりますことを念願いたし、具昌碩の篆書体で書き現わされたもので、日日仏恩を仰がれる仏教徒といたしましては必携のカレンダーであります。仏誕、成道、涅槃、大安、仏滅、友引など明記した金色刷の美術印刷でお部屋の装飾を兼ね備えたものであります。

アジアの難民救済に 全日本仏教徒が慈悲の手を!

インド救ライの父・宮崎博士が航空機事故で死亡されて今年には3周年、救ライの為の募金、或はベトナム難民の救済基金など、わが国仏教徒の手で、いまや人類の危機感をひしひしと感ずる時、これが募金活動はわれらに荷された使命感とも申すべきでしょう。

この目的達成のために別掲写真の如き仏教のカレンダーを創案、「全仏」の推薦を得てここに発表することになりました。何卒、天下具眼の諸氏に訴え一大募金活動の展開を企図するものであります。心経ポスター販布による益金は日本仏教徒による難民救済基金として、アジアの全域にわたり救済の手を差しのべることとなります。

- 目 標 第一期 5万枚(S 49.10月中) 総部数10万枚
- (印刷部数) 第二期 5万枚(S 49.11月中)
- 取扱所 全国寺院又は仏教団体
- 申込み 一括申込部数を 100枚単位とし一枚売価¥600 協会への払込みは一枚に付¥500とする。

(注) ポスター下段余白に特別印刷希望の向きは500枚を単位とし、表示文言原稿は予め原稿を添え協会に申込んで下さい。仏教徒(檀信徒)にひろく販布方お願い致します。

(配送) ポスターの配送は申込順に11月1日より開始します。

主催 アジア難民厚生協会 東京都中野区鷺宮3-27-10 〒165 電話(03)338-3389(中村)

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五(東京本願寺) 電話〇三(八四三)六三三(四一)三